



◇藝術の殿堂へ

まっつしくらに精進する

吾等の畫伯土井勇君

布哇の傳説を繪に描く

MAR 14 1929

若き第二世達が、ドクトルルヘ
デンチストへ、マキヤニツク
へご専門職業を追ふて行くの
に背いて藝術の殿堂へ獨り黙
々の歩みを續けて行つた土井
勇君——彼は未だ二十五歳の
若さだが既に米國畫家録に其
の名を連ねてゐる

米國美術院（アメリカン・
インスティテュート・グラフィッ
ック・オブ・アート）では
毎年全米畫家の作品中から
五十點だけ選抜して紐育で
展覽會を開催するが土井君
の木版畫が一九二六年に選
拔され一九二七年に再度選
拔の榮譽を得たので米國畫
界は此の若き東洋人美術家
の進出に驚異の眼を睜つた
のであつた。布哇及びアメ
リカの第二世中、藝術方面
で國際的に知られてゐるの
はたつた彼れ一人である

其の土井君がヒヨツクリ故郷
の布哇へ歸つて來て先日市内
ペレタニア街のトルー・ベル
で個人展覽會を開催したが目
下當地來遊中の英人美術批評
家ブレイキ氏は「布哇の驚異」
だに激稱し、タイザー、ブレ
チンの兩紙文藝欄は一カラム
以上を費して此の若き美術家
の出現を報じ其の技を讃した

亦そうであつた。彼れの長髪

は肩をおわうとする、其れを
搔き上げながら彼れは語る、
『布哇の自然は明るくて描く
氣はしません、特に景色のよ
いところは觀光客招致のため
人工美を加へられてゐるので
私は其んなところは見向きも
せず古い古跡なごを描かうと
思つて居ります。近頃布哇の
傳説を材料にした木版をやつ
て居ります』——其の作品を
一つやつと描き上げたところ
であつたが其れはマワイ云
ふ男が太陽の速さに農夫が種
蒔きに困るのでハレアカラ頂
上に立つて繩を天に投げ太陽
の足を折つてユツクリ、歩
ませるやうにしたと云ふ彼が
小さいときに聞いたお噺を木
版にしたものであつた

土井君は後期印象派の油繪
を主とし木版、水彩をやる

が其の繪は西洋思想の中に
東洋趣味を加へた飽くまで
も獨創的のもので、嘗つて
版畫圖案を人から勧めらる
まに試みたが紐育の衣裳
屋から高價で買ひ取られた
友人達は「君が此の方面に
進んで行つたらワンダフル
オブチュニティーが待つてゐ
る」と熱心に勧められたが
「たごへ飢れてもコンマー
シャル・アーチストにはな
りたくない」と云つて矢張
り暗い印象的な繪を描いて
ゐる、彼れは飽く迄も藝術
の殿堂に向つて精進しやう
とするのである

錦繪の日本、油繪の日本——
彼れは其れに憧れてゐる、自
分の繪をもつと深いものにし
たい爲めに日本へ行かうと願
つてゐる、けれども彼れの故
郷加哇のカラヘオには老たる
父母と幼き兄弟が彼れを便り
に暮してゐる『私は長男です
から暫く老た親の行末を觀な
ければいけませんのでユツク
リ急がず一生涯か、つてもよ
いから自分の氣の人た繪を一
つ描きたいと思つてゐます』
——此の孝心深き若い藝術家は
語つて深い溜息を洩らした。
(繪は彼れの近作の一つ)

「ハラ」に於ける 赤松總領事

有益なる南

「ハラ特信」 赤松總領事は十日午後三時(サンデー)ヒロ、ワイナク名護忍亮案内によりコナより來耕したり。コハラ日本人會長下川氏同書記桐田氏及本彦太氏、小林圓成氏等を迎へをうけ直ちにコハラ耕地、マフコナ方面、コケ、ハヴイ方面を巡視つカバアウ南部ホテルに小息の上 各地の有志見してコハラ在留民の事につき詳細に涉つて尋ぬるりたり、其れより藤生、松本、下川、太田の諸案内にてカバアウ以東の部ホテル樓上に於て日本主催の歓迎晩餐會あり歡賓六十餘名にて桐田氏のあり其れより理事長下川歓迎の辭あり之に對して事の挨拶ありたり總領事抄の要點は「本日は當地志諸氏の出迎へをうけ更に重なる歓迎晩餐會を催誠に感謝の至りでありま先程から有志の案内によ地を視察しましたがあまり話を聞きませんが、在留民は

コハラ・クラブ・ホールに於て一般講演會あり若山氏の司會により總領事の約二時間に涉り南米事情につき詳細最も興味ある講演をなされました
十時半閉會、翌十一日午前九時ワイメアに向け出發なさいました
チフテリア注射
チフテリア注射、コハラに於て第一回の注射は當地醫師ツレード・ウエル氏によりハヴイに於て十一日(マンデー)約五百人の兒童に對して行はれた

「マヤスリン」ストーブ爆發し 中嶋氏の二兒慘死

臨月の母親も大火傷危篤

「馬哇支局發」 去る十日マヤスリン病院の中嶋一雄使用のギヤスリン・ストーブに引火して愛娘二名が全焼に包まれて慘死した構あつた、此日午前十時頃妻女ミハルが子供のためクを温めるべく前記のギヤスリン・ストーブに引火した がギヤスリン足のため注足しつゝ、あつ一ギヤロン入りのタンク火し轟然爆發し同女は全焼を浴び失心し、隣家浦氏や其他の人が子供の聞き馳つけ此の有様を聞き妻女の火を漸く消したが同室にあつた愛娘ミハルが同室に包まれて死なれたる火焔に包まれて逃げ様なく悲鳴を上げ即ち幸ひにして家屋は無事を得た、が二兒は實に面てられぬ有様で指や鼻を既に見るかけもなく見せして思はず顔ををむける程であつた。妻女ミハ

妊娠中で 本月が丁度臨月であるが、過半身火傷を負ふて居る事故産後の程が氣遣はれ居る夫君一雄氏は此の突發事件のため茫然自失目下マヤスリン病院に入院中である

漁船第三馬 哇丸の來航

カフルイ港内を三周(馬哇支局發) 豫てホ府で新造中であつた、馬哇漁商會社の第三馬哇丸は十二日九時カフルイ港に廻航した、着港と同時に港内を三周し棧橋に横付けされ、松村神官の御祓に吉例に因つて餅撒きの儀式を行つた。同船は七十四呎の長さに十二呎半の幅で吃水五呎、五分の三で十噸あり、經費一萬七千弗餘を要した最新式のもので百十馬力の機關を据へ付けてある、船長は小峰末助氏で乗組員十名である
同會社目下役員は
社長 上田 熊吉
同副社長 増田 音三郎

書記兼支配人 高野 守一郎
會計 山本 佐市
監査 川口 力一
同 中司 元晴
尚ほ十三日午後よりカフルイ馬哇神社に於て進水祝ひが催される
新川青年留別
演奏會開催
青年音楽家新川加徳君は今回歸國の余義なきに至りたるに
より來る十五六日兩夜氏の統率する音楽員によつて留別演奏會
來る

